Osaka University Knowledge Archive

Title	在宅寝たきり老人の自立意欲に関連する要因についての分析
Author(s)	阿曽, 洋子
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3110177
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 92 】

氏　　名	阿　曽　洋　子（あそ　ようこ）
博士の専攻分野の名称	博　　士（医学）
学位記番号	第　12245　号
学位授与年月日	平成8年2月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	在宅寝たきり老人の自立意欲に関連する要因についての分析
論文審査委員	(主査) 教授　多田羅浩三 (副査) 教授　若杉　長英　　教授　荻原　俊男

論文内容の要旨

【目的】

本研究は、在宅寝たきり老人の日常生活動作（ADL）の内容および心理状況について分析し，ADL区分別に，在宅寝たきり老人の自立意欲の有無に関連する要因を明らかにすることを目的として実施したものである。

【方法ならびに結果】

1. 方法

1) 対象：本研究は，大阪府I市において府のモデル事業として，昭和59年度から始められた在宅寝たきり老人訪問看護サービス事業と同時に開始した。昭和59年度から平成5年度の10年間に把握された，65歳以上の在宅寝たきり老人総数556名を対象とした。

2) 方法：データは4名の保健婦の訪問観察記録から毎年度末に収集した。収集したデータは，性，年齢，初回訪問の年月日，寝たきりになった年月日，寝たきりになった原因，日常生活の状況，心理状況，介護状況，住居の状況，除外された年月日，除外理由である。生活および心理状況のデータに関しては，訪問事例に対する判断例について，4名の保健婦で協議して保健婦の観察による判断の統一を図るため検討会を持った。特に，自立意欲については，保健婦の初回訪問時に老人との対話や動作，家族からの情報をもとに，①自分のことはできる限り自分自身でしようとする姿勢がある，②可能な限り自分で動こうとする，③話しかけに応答する，④老人自身の要求や希望を表明する，という4点をすべて満たしている者を自立意欲ありと判断し，それ以外の者を自立意欲なしと判断した。この自立意欲の判断に関してその再現性をみるため，1年後に再調査を行ったところ，93.4％の老人において同じ結果を得ることができた。また，ADLについては，移動，寝返り，起坐位，更衣，食事，排泄，入浴の7項目の動作能力に対し，0点（援助の必要なし），1点（いくらかの援助が必要），2点（すべてに援助が必要）の点数を付し，それらを合計してADLの点数とした。対象者のADLの合計点の平均は8.1点であったため，1点から7点を「高ADL群」，8点から14点を「低ADL群」とした。

2. 結果

分析によりつぎの結果を得た。

1) 自立意欲に関して，高ADL群の在宅寝たきり老人は低ADL群の在宅寝たきり老人よりも，自立意欲のある人の割合が有意に高かった。

2) 自立意欲の有無と年齢階級区分，身体状況，心理状況，家族や介護の状況，住居の状況の項目との関連をみたところ，χ^2検定により有意差がみられたのは，高ADL群は年齢階級区分であり，低ADL群では年齢階級区分，言語，聴力，視力，移動，寝返り，起坐位，更衣，食事，排泄，意思表示，家族への気兼ね，褥瘡であった。

3) 2）で有意差が認められた項目に対し，自立意欲と関連する要因について重回帰分析を行ったところ，高ADL群の寝たきり老人では，統計的に有意な項目は見いだせなかった。低ADL群の寝たきり老人では，更衣動作および食事動作，家族への気兼ねが統計的に有意な項目として選択された。

【総　括】

先行研究により，自立意欲は在宅寝たきり老人の1年後のADLの変化に関連すること，および10年間の縦断研究において自立意欲が生命予後と関連することを報告した。本研究においては，初回訪問時のADL区分別に自立意欲に関連する要因について分析をおこなった。その結果，更衣動作および食事動作，家族への気兼ねが，低ADLの在宅寝たきり老人にとって，自立意欲の有無と関連を有する要因であることが明らかになった。これらの要因は，在宅看護における重要な観察点と考えられる。

論文審査の結果の要旨

本研究は，在宅寝たきり老人の日常生活動作（ADL）の内容および心理状況について分析し，ADL区分別に在宅寝たきり老人の自立意欲の有無に関連する要因を明らかにすることを目的として実施したものである。

研究は，大阪府I市において府のモデル事業として，昭和59年度から始められた在宅寝たきり老人訪問看護サービス事業と同時に開始し，平成5年度までの10年間に把握された，65歳以上の在宅寝たきり老人総数556名を対象としたものである。

調査データは，保健婦の訪問観察記録から毎年度末に収集した。調査項目は，性，年齢，初回訪問年月日，寝たきりになった年月日，寝たきりになった原因疾患，日常生活状況，心理状況，介護状況，住居の状況，家庭訪問から除外された年月日，および除外理由である。ADLについては，移動，寝返り，起坐位，更衣，食事，排泄，入浴の7項目の動作能力について，0点（援助の必要なし），1点（いくらかの援助が必要），2点（すべてに援助が必要）の点数を付し，それらを合計して対象者のADL点数とした。ADL点数が1点から7点の者を「高ADL群」，8点から14点の者を「低ADL群」とした。また，自立意欲については，保健婦の初回訪問時に老人との対話や動作，家族からの情報をもとに，①自分のことは自分でできる限り自分自身でしようとする姿勢がある，②可能なかぎり自分で動こうとする，③話しかけに応答する，④老人自身が自分の要求や希望を表明する，という4項目をすべて満たしている者を「自立意欲あり」，それ以外の者を「自立意欲なし」とした。

自立意欲に関して，高ADL群の在宅寝たきり老人は低ADL群の在宅寝たきり老人よりも，自立意欲のある人の割合が高かった。自立意欲の有無と調査した22項目との関連をみると，高ADL群の者では年齢階級区分，低ADL群の者では年齢階級区分，言語，聴力，視力，移動，起坐位，更衣，食事，排泄，意思表示，家族への気兼ね，褥瘡の項目について，自立意欲の有無と有意な関連がみられた。低ADL群の在宅寝たきり老人について，これらの13項目を説明変数，自立意欲の有無を目的変数として，重回帰分析を行ったところ，更衣動作，食事動作，家族への気兼ねが有意な項目として選択された。

本研究は，老人の自立意欲という心理状況を客観的に捉えることを試み，日常生活動作能力の低い在宅寝たきり老人において，自立意欲の有無と関連を有する要因を明らかにした。この結果は，今後，効果的な訪問看護を確立する上で重要な示唆を与えるものである。この点において，価値ある研究であり，学位の授与に値すると考えられる。